

# ORERO

# NO MUSIC NO LIFE



# 53

**09/29** 阪神タイガース、リーグ優勝！  
**10/29** 神戸フリースクール15周年記念祭

## 神戸フリースクール 2005 10.29.SAT

### 15周年祭 ★ 東灘うはらホール



バンド 演劇 講演 交流会 etc

特別講師★**奥地圭子**さん

主催★神戸フリースクール

割引券持参の方は、当日一般1,500円、19才以下800円でご参加いただけます。(小学生以下は無料)ぜひお越しください。  
《開場15:00 開演15:30》会場内で講演などの他、いろいろなボランティアグループのパネル展示とともに、交流会を行います。親子ルームもありますので、小さなお子さんも一緒にお越しいただけます。

### 祝15周年 木村 蘭

私が神戸フリースクールと出会ったのは、もう7年以上も前のことになる。私はもうその頃の自分とはだいぶ違っていると思う。でも、神戸フリースクールは変わらない。訪れるといつでも、出会った頃と同じ心地いい空気が私を安心させてくれる。

そんなKFS独特の空気を説明するのはかなり難しいし、うまく伝わらないかもしれない。私が思うのは、親も含めてたいの大人は、自分たちの価値観の枠の中に子どもを留めておこうとする。その枠内からはみだした子どもは、なんとかして自分たちの許容範囲に戻そうとする。その枠を広げようとはなかなかしない。でも、KFSはそうじゃない。そんなわけのわからない枠はない。何かを評価の対象にされたりしない。だからありのままの自分でいられる。人をむやみに非難したりバカにしたりしない。だからいつでも、心から笑うことができる。だから「心にくくりつけた荷物を静かにおろせる場所」(by コブクロ『ここにしか咲かない花』)なんだと、私は感じている。

しんどい思いをしている子どもたちにとってもそういう場所であってほしいし、軽くなったその心でいろいろな可能性を発見していける場所として、神戸フリースクールがいつまでもずっと、そこにあってほしいと心から願っている。

H.P - WWW.FREESCHOOL.JP/KFS  
MAIL - TOKASYA@HOTMAIL.COM  
お問い合わせ・TEL & FAX 078-366-0333  
住所・兵庫県神戸市中央区下山手通8丁目8-10  
※オーレロ通信の一部、または全文の無断転載を禁止します



神戸フリースクール15歳

田辺 克之

続けていたから、多くの
人に出会えた。あの時迷っ
ていた。家の中が大きく揺
さぶられて、柱が傾き屋根
が破れ食器はことごとく
破壊され、潮時かなと一瞬
迷った。あのとき波のよう
に押しかけるエールがなけ
れば、いま神戸フリースク
ールは存在していないかも
しれない。傾いた家屋の中
で家具を片付けていたら、
相談の電話が鳴った。なに
もこちらの事情がわから
ない遠方からの電話であっ
た。内容は深刻だった。ほ
こりだらけの部屋で、片手
に箒を持ったまま、突っ立っ
て相談を聞いたことを、昨
日のように思い出す。その
人の消え入るような声が、
そして僕が大きな声で「い
まあなたに倒れたら、子ど
もはどうするのですか」と
叫んだ声がよみがえる。そ
してその声は自分の心につ
きささる。いまこのフリースクールの灯を消したら、
子どもはどこへ行くのだ

ろう、子どもはどうした
らいいのかと自問自答す
る。ぼんやりと時間が流
れ、震災直後の記憶はあ
るが、それから数日間ど
うしていったのかはつきり覚
えていない。よごんだ時間
を破るように電話が鳴り
続ける。目を覚ませと電
話が語りかける。そして
再出発しようとする。
その直後からまるで洪水
のように湧き上がる電話が
あり、食料や飲み水を届
けてくれる訪問者もあり、
ぼくらはヤミから舞い戻
ることができた。おかげさ
かもしれないが、そんな
感じだった。
ひとつ間違えば、あの
枕元のテレビの台がこち
らに倒れていたら死んで
いたかもしれない。同じ時
間に六千人の命が亡くな
った。おれは生かされた、
お前は生かよとだれかに
後押しされたように感じ
た。でもあれ、かわらぬへら
へらと生きている。僕もや
つと白髪が目立つようにな
ってきた。そろそろ一人
前かな。これからかな、お
もしろいの。

なんやろ

えりな

神戸フリースクール15周
年祭おめでとうございま
す。

自分では何を書いたら
いいかわからないので先
生に言われた、自分にとっ
ての「フリースクールの意
味」について書いてみます。
フリースクールは私にと
つて…なんやろ。

そこまで深く考えた事
がないからわからないかな
…。

でも学校みたいに絶対行
かなきゃダメって所じゃな
くて、行って楽な所。自然
に足がむいちゃう所。
毎日楽しくて、時間が
過ぎて行くのが早い。
まあとにかく大好きな場
所。

なんか宣伝っぽくなった：
これからもここでのおんび
りすこしていけたらいいな。
先生！次は20周年祭め
ごそうね！

揺れる心

まりママ

子どもはあなたの子ど
もではない。

あなたの弓によって
生きた矢として放たれる。
弓をひく。あなたの手
にこそ喜びあれ。

子どもは明日の家に住
んでいるので
あなたはそれを訪ねる
ことも夢みることもでき
ない。
ただ、弓をひくあなた
の手に喜びあれ。

カール・ギブラン著
「預言者」より

今年のはじめに読んだ
本三砂(みさご)ちづる著
「オババ化する女たち」
に引用されていた詩です。
いいなと思って書きとめて
いたこの言葉が、麻里の
短期留学に際して揺れる
心を支えてくれました。
このときどい、不安、寂し
さは、私だけのものではな

考える種⑦

フリースクールにかかわるようになって、たくさん子ども達に親しくしてもらってきた。年令も親
である立場もぬきにして、一人の人としてどう思い、何を考えているか子ども達には見ぬかれてしま
うから、おかげで常に自分を見つめる事が出来た。

「トラウマの国」(高橋 秀実 著)という本は「自分探し」とか「トラウマ」とか「スローライフ」
とか取り上げて、そういう事にきまじめに取り組んでいる人達と、何かギャップを感じて居ごこち悪そ
うにしながらい対している作者とのかけひきがおもしろくて、笑いながら読んでしまった。

「自分」というものを「はつきさせる」という話しのところで——人にはこう考えられているが、こ
う考えている私。あるいは、こう考えているが、人にはこう考えられている私。こういう形にするとメリハリが生じます。実はこのメリハリ部分で私たちは「私」を実感できるのではないのでしょうか。——という部分がありました。

私もいろんな人とかかわりの中で、自分探しをしていたわけでもないのに今まで知らなかった自分のあんな面、こんな面、と気づかせてもらった。年をとる事は確かに体力は落ちるし、目は老眼でかすみ、大好きな本も読みづらくなるし、顔にはシミやシワが増えてせつない想いもするけれど、こうして内面的には自分の事がだんだんわかってきたり、柔軟な物の見方が出来るようになって「年を取るのもいいもんかも?」と私は思っている。何であれ、年月を積み重ねていく、続けていくという事は大きな意義があるんだとやっと今ごろ気がついた。

世の中は動きが早くいろいろなものがどんどんかわっていく。だからこそ、フリースクールがただそこに[かわらぬ場所]として存在し続ける事は大切なのではないのでしょうか。一日、一週間、一ヶ月……と、いつのまにか15年たっていたという事なんだろうけどその間この「居場所」でどれだけたくさん子ども達が時をすこしてきたのか……そして、これからまた……

大石 寿子

アイラブ

フリースクール

はまじ

高校の卒論を書くため
にフリースクールを訪れて
早六年。その間、メンタル
フレンドとしての活動や、
ひきこもりを題材とした
映画「home」の上映会、
大学の卒業の祭にはフリ
ースクールメンバーと一緒
に卒業祭にも参加させても
らいました。子ども達や、

フリースクールを取り巻く
たくさんの人々との出会
いに、多くの刺激をもら
いました。これからも子ども
達と共に歩んでいく、人と
人との輪の中に僕も交わ
つていきたいと思えます。

祝15周年

リョウちゃん

僕は神戸F.S.にこくこく
最近関わらせてもらう
ようになつたりリョウちゃん
です。この15年間の壮絶な
歴史を肌で体験はしてい
ませんが、全国の支援や協
力を得て再出発。大へさん
自身が我ながら不思議のひ
とつだと?胸を張って言え
るほどの15年間。
改めて15周年おめでとう
ございます。





### ニュージールランドからのレポート

まりちゃん

9/2 こんにちは。まだりです。突然ですが、ニュージールランドに行く事になりました☆ホームステイをしながら語学学校に通う事になっています。

多分ホームシックになる確率100%ですw  
9/22  
konni chihwa!  
minnagenkin  
ishitemasuk  
a? watashih  
oshoukiyatta  
masu(warai)

9/23 今、語学学校から書いてます。昨日とは別のPCでやったら日本語打てました。こちらは今、8時50分、日本は6時前です。学校は授業が分かんない。  
10/5 ちくりん、レスありがとうございます☆ちなみに今はランチタイム。1ヶ月、最初の2週間はホームシックになつたりして早く帰る

たいってずっと思ってたけど今は1日がすぐ終わっちゃうって思ってる。あと3日かあ。って毎日カウントダウンしてます。(笑)  
BBSより抜粋

### 「フィリピンに行ってきたよー」

よつぴー

東、美歌ちゃん、私も三人とも初海外でパスポートの申請やらバタバタしてしまいました。8月15、20日までの5泊6日、最初の2泊はバギオで後の3日はマグパラヤオ村でホームステイさせてもらいました。

バギオではハビリテエーションセンターやろう学校、市場、ショッピングセンター、将学生の家等を回り、向こうのスタッフと一緒にご飯を食べたり、最後のパーティーでは歌や踊りをしてくれました。私たちも「涙そうそう」をさんしんにあわせて歌ったり、向こうの結婚式でする踊りにも参加しました。マグパラヤオ村に着い

てからは、小学校、高校、大学を回ったり、井戸やたくさんの豚を見ました。どこに行っても暖かく迎えてくれてお料理もすごく美味しかったです。豚肉と酸味の効いたスープ、甘い野菜炒め、もう一度食べたいです。さよならパーティーもダンスをしたり、はじけました。

びつくりしたことが、二つあります。一つはフィリピンは暑いと思込んでいたが、バギオは山の中で寒かったこと。向こうで上着を買ったほどです。もう一つは虫が意外と少なかったこと。よくわからない虫にたられるんじゃないかと思っていました。この旅でたくさんの人や物との出会いがあり、普段考えないことや気付かない事がたくさんあって、行けてよかったなあとしみじみ感むけたいです。行ってくれた先生、引率してくれた桑原さんを始め一緒に行ったメンバや、向こうのホストファミリー親切にしてくれてくださった人に感謝の思いで一杯です

### 「不登校」

ともこ

私は今、不登校です。何で不登校になったかは、いじめにあったのと、友達関係が普通の時でも息苦しかったからです。なぜ息苦しかったかは、私はずっといじられた後、友達といじつてきてそのまでは普通なんですけど、いじり方が日に日に強くなってきて、ついに「天羽のお金でお菓子買おうやあ」とか言っで買わされたり、トイレしとじこめられたり、頭を何回もたたいてきたり、「死ねやあ」とか言われたり……

全部冗談で言ったりしてるんかもしれへんけど、うちはめっちゃつらかった。そして、1年間、こんなが続いた。その1年の間、うちは2回集団無視された。精神的につらかったし、親にあたりたりもしたし、死のうかとも思った。でも、死ねなかつた。なんでかはこんな奴ら(学校の人の)のせいで、なんでうち自分ですんなあかんね

### 感じる心



んって思ったからだ。そして不登校になった。最初は親にも怒られたし、しんどい時期だったけど「KFS」(神戸フリースクール)に来て、変わった。めっちゃ楽しい事が毎日あって、周りのみんなもめっちゃ優しくしてくれる。今は、あの時死ななでよかったあって思ってるよ。KFSに出会えてよかったあって思ってます。

ずいぶん以前になるが、明石市内の学校がまだ「丸刈り」を強制していたころ、それが中学生らしい身なりだと教え、違反する生徒のうしろからバリカンを持った教師が追いかけるという漫画のような

光景が見られた。そこで小学5・6年生の保護者が中心になって署名を集め、校長と交渉した。「やがてそういう時代も来ると思うが、今年は無理」との説明であった。あとからわかったことは、あの校長は来年定年で、次の校長にまかせるとのことだった。ややこしい事は先送りする習性が身に着いてしまったのだろう。似たようなことだが、明石の教育委員会に「通学定期」を認めてほしいと交渉にでかけたときも、「神戸市はどうだろう」と委員が言ったのを覚えてる。いや今は神戸市内の問題ではなく、明石市内の子どものことでお願いに来ているのだから……と。だれよりも先駆けてやるうなどという熱心さはなく、不登校の子どものたちの実情を知ろうともしない。教育のプロに「感じる心」を要求するのは無理なことなのだろうか。ほんとうに情けなかつた。おまえがやれよ、と言いたかつた。おそれずに、まわりと歩調を合わせるのだ

けに汲々としないで、不登校の子どもや保護者のために「肌脱」という気持ちにはならないのか。そして次は神戸市の教育委員会である。その前に県も行ったが、窓口が違うと署名をつぎかえされた。全国ネットにも呼びかけて集めた2600名あまりの署名である。それを持参して、不登校生の「通学定期券購入」をお願いに、フリースクールの子ども2人といっしょに神戸市役所に向いた。しかし回答は「時代の流れで、いずれ改善されますよ」と他人事のように話すのを、子どもは見逃さなかつた。「そんな態度が不登校生を追い詰めるのが、わからないのですか」と加奈ちゃんが叫んだ。流れをあなたが変えようとはしないのですかと僕も質問したが、兵庫県は関東とちがつてハードルが高いのですという回答だつた。ハードルが高いというのは、いかに子どもに對する人権意識が低いのかというところで、自分たちが駄目な教育者ですと言っ



(田辺 克之)